

2024年度 自己評価・学校関係者評価

認定こども園 西那須野幼稚園

本園では、教職員に対してチェック方式による自己評価を実施しております。
認定こども園への移行に伴い、2019年度より評価の結果を公表します。

・評価は3段階評価 [達成されている、概ね達成されている、未実施・取り組みが不十分]

評価項目	自己評価	取り組み内容
教育理念や方針の理解 環境構成 教育課程の編成と見直し 評価と反省	達成	<ul style="list-style-type: none"> ・行事や季節を感じる取り組み ・異年齢保育、混合保育 ・なかよし保育(支援児のグループ保育) ・自由保育の充実(環境構成等)
健康と安全への配慮 幼児のみとりと理解 指導とかかわり 保育者同士の協力・連携	達成	<ul style="list-style-type: none"> ・視診、体調確認(体温測定カード等) ・感染症対策 ・避難訓練 ・年齢や発達に沿った見守り、言葉がけ
教師としての能力や適性 良識とマナー 保育の楽しみ・喜び 感性・周りへのアンテナ	達成	<ul style="list-style-type: none"> ・アプリによる業務効率化の取り組み ・意見交換 ・学期末反省会
保護者支援 情報の発信と受信 守秘義務の遵守 クレームへの対応	達成	<ul style="list-style-type: none"> ・園からのおたより ・重要事項の説明 ・アプリによる連絡・確認 ・保護者相談
地域の自然 地域とのかかわり 小学校との連携	概ね達成	<ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援、園庭解放 ・リ・ユニオンデイキャンプ ・小学校訪問、山林自然観察園 ・地域(五軒町自治会)協力による避難訓練 ・地域に暮らす医療的ケア児の避難訓練 ・菌ちゃん野菜づくり
研修・研究への意欲や態度 専門性に関する研修・研究 遊具や教材に関する研修・研究 園の環境に関する研修・研究 自らを高めるための学習	概ね達成	<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師による園内研修 ・園外研修 ・職員研修旅行 (観劇：東京都、防災：福島県) ・専門機関との連携



- ・子ども達の体調につきましては、コロナ禍後も気をつけて過ごすようにし、感染症の大きな流行はありませんでした。前年度は体温測定表に毎日記入をし登園していましたが、4月からは各家庭で検温してもらうようにしました。しかし11月に熱性けいれんを起こした園児がいて救急車を利用したことがあり、その機会に見直しをして、再度体温測定表に記入をして登園することにし、保護者にも注意喚起をしました。
- ・行事の見直しについては続けて行ってきましたが、年少組は発表会をなくして、遊びの時間が充実できるように進めました。今までも年少園児全体で行ってきた自由保育の時間がありましたが、その持ち方をさらに工夫をして内容を検討しました。まだまだ反省がありますので、次年度に更に続けて検討していきたいと考えています。
- ・また、園児全体で行っている混合保育でも、子ども達の様子と気づき等から次につながるような記録の工夫をして環境づくりをしました。今後、その記録を職員が共通理解できるように職員内で配信していく予定です。
- ・カリキュラムの見直しも続けて検討し、月単位の月案や壁面飾り制作等、2か月単位や季節に合わせて等で行ってみました。上手くいった点やいかなかった事もありましたので、今後は子どもの様子を合わせていけるように検討課題です。
- ・運動面では、年中・年長で取り入れてきた外部講師による運動遊びの時間が、講師派遣先のYMCAの都合によりできなくなってしまいましたが、その分も子ども達が体をたくさん動かして遊べるように積極的に戸外遊びやホールでの遊びを行いました。周りに刺激されながら挑戦する子ども達の姿が多くありました。
- ・学期ごとの職員反省会でも、どのような内容の工夫がどのような事につながっているか積極的な意見交換ができ、互いの工夫した保育を知ることで参考になりました。
- ・保護者との連絡帳をなくして、コドモン保護者アプリでの連絡にしました。朝の決めた時間に保護者からの連絡を確認して、必要に応じて放課後に返信することにしました。それまで保育中に連絡帳に返事を記入する時間を取っていましたが、その分を子ども達と過ごせるようになったことは良かった点です。ただし、前年度に電話連絡を少なくしたことに続けての取り組みで、保護者との実際のやり取りがさらに少なくなっている中で、家庭・保護者との信頼関係・連携を大切にしていきたいと思います。
- ・今年度も職員の研修の機会として、11月には観劇、12月には福島県の『いわき・ら・ら・みゅう』に行き、3.11東日本大震災のパネル等の展示をみながら防災について再度考える機会を持つことができました。10月には前年度に続いて市村奈緒子先生(渋谷区子ども発達支援センター)に来園していただき、『こどもの姿から学ぶ発達支援』についての学びを深めることができました。今後も子どもに、保護者に寄り添っていけるように心がけていきたいと思います。



新型コロナのパンデミックによって私達の日常生活は大きく変わった。様々な制限のなかでの子育ては特に大変であったが、以前の日常生活の様相を取り戻している。本園においても、感染リスクに配慮した遊びから、本来の遊びが展開出来るようになった。

しかし、これまでのコロナ禍による室内での生活が主というライフスタイルの変化から、子ども達の経験の種類・量や運動的な遊びの経験不足は否めない。報道にもある通り、運動能力も含めた成長は少しゆっくりとなっている。こども家庭庁からは「骨折事故に関する危険な場面と対策」というリーフレットが出たくらいである。

本園においてもその傾向は否めず、今年度は、遊びの継続や外での活動を優先し、各学年とも数値化できる運動能力については、昨年度に比べ平均値の向上が見られた。

さて、創立以来のインクルーシブ教育に加えて、スタッフ一同が原点に立ち返って再構築してきた保育実践が実を結びつつあり、専門家からも評価されるようになった。昨年度は、保育者向けの月刊専門誌『Pri Pri 10月号』（世界文化社）にインクルーシブ教育実践である「コミュニティ・インクルージョン」特集として掲載された。また、この2月には、『保育者・教育者になる人のための特別支援教育-当事者の声を聴く-』（萌文書林）が発行され、寄稿する機会も与えられた。

これらは、建学の精神「自分を愛するように他の人をも愛しなさい（聖書）」が、教育の場において、脈々と受け継がれてきたことが、教育の専門家からも評価された結果と考える。

園外の主な研修としては、レッジョ・エミリア・アプローチが実践されている北欧の幼児教育視察に1名、国内先進園視察で福井県1名、鹿児島県2名を派遣し、善き学び機会が得られた。

ところで、子ども達が社会で活躍しているであろう2045年は、AIが人間を超えと言われてしている。コロナ禍で前倒しになったVUCAの時代に私達も直面している。今後、AIが加速度的に発達することは、人類にとって必ずしも良いことだけではなく、大量失業や経済格差拡大などの負の側面も併せもつと考える。子ども達は、我々以上にその時々々の適解を探求して生き、折れない心（レジリエンス）、自己統制力（意思・感情・行動）、価値観の違う人と一緒にやり遂げる力等に代表される非認知能力（≠IQ以外）が求められる。その非認知能力の基礎は、幼児期の遊びや他者との協働による課題解決を通して育まれると言われる。また、非認知能力は、認知能力とも相まって成長していくことが報告されている。本園は数年間かけて、遊びを中心とした保育に移行してきた。そして、コロナ禍の行事再編により、進捗と質的充実が図られつつある。



このコロナ禍や戦争による不安の影響と思われるが、担任教師の自己評価のなかに、今年度も落ち着きのない子ども、運動能力低下という記載が見られた。東日本大震災の年に岩手県・宮城県・福島県の重篤な被災地に生まれた子どもは落ち着きのない子が多く、その追跡調査では、語彙数が少ない子どもの増加、後天的知的発達遅滞の比率が増え、その原因の一つが不安のなかの子育てと報告されている。今年度、教師達は、このコロナ禍の子ども達も同じような道を歩まないために、絵本の読み聞かせに加えて、何らかの対応を家庭と連携して努めてきた。また、保育でも遊び、自発的な園庭遊具遊び・縄跳び等を通した運動能力の向上にも努めている。

また、引き続き外国をルーツとする子ども達も増えて、多様性を大切にした保育の課題についても追究していきたい。

「保護者支援」については、今年度も副園長・クラス担任・アドバイザーとして今野歩先生が担当し、必要に応じて他の機関と連携している。加えて、経験豊かな宮城教育大学教授の長谷川茂先生には、就園前から卒園後のアフターフォローまでサポートいただき感謝したい。

最後に、保護者の皆様のご理解・ご協力のもと、ICT化が軌道に乗りつつある。次年度は、保育の見える化や仕事の効率化について更に進めていきたい。

学校関係者の評価 《宮城教育大学名誉教授 長谷川 茂》



去年は、コロナ等の感染症の影響も薄れ、子どもたちは思い切り自由に遊んでいる様子で、動きも活発になっていた。大人も、あまり神経質になり過ぎずにいられたようだ。全体としてのびのびしており、先生のゆとりも感じられ、山林などの園外保育活動も活発に行っているようでとても良い。

来年度、幼保連携型への移行にあたり、幼稚園としての「集団」、「カリキュラム」に焦点を当てた教育部分に加え、「育つ・育てる」、「発達」という保育の面にも着目するといった見方が必要となる。子どもの中で育っていく力や微かな心と身体の発達を受けとめる、いうならば「一人ひとりに合わせたカリキュラム」が求められる。保育者として、子どもへの小さな発見ができることよい。実際、先生たちは子どもをよく見ており、私が来たとき報告してくれる。小さな変化も見逃さない『みる目』を備えている。その積み重ねがその子の発達であり、保育者としての自信にもつながるのではないだろうか。「教える・応じる」といったこれまでの得意分野を存分に生かしつつ、一人ひとりの育ちを意識して、これからも保育者としての力を発揮してもらいたい。

また、近年の教育・保育は、運動や非認知能力の大切さが謳われているが、詩で表現されるような人間の微妙な心に触れる機会と、そこから何を感じ取るかも大切であり、絵本やお芝居に触れるといったこれまでの取り組みも維持していく意味がある。

そして、乳幼児保育のもう一つの大切な役割は、保護者の支援である。初めて親になった人は、保育の専門家である園の先生に頼ることが多いかもしれない。しかし、親と子のつながりから生まれる愛着は、発育の基礎となる大切なものであることを知ってもらわねばならない。子育ては最も大変な仕事だと思う。親は、悩んで、苦しんで子どもを育てる。その過程を経て、親子の絆がつくられる。保育者はそれを温かく見守り、時には援助の手を差し伸べるといった相互関係によって子どもの育ちを支えていく。

昨年は、保育雑誌 PriPri に、この園の取り組みが掲載された。掲載ページ最後の部分に園長の言葉がある。「それでも、ここにある、というのが大切なんです」これが、この園の大切な役割であり、地域の資源である。

卒園した小学 3 年生が夏に集まる「リユニオンデイキャンプ」は、コロナ禍で 2 年間途絶えたものの、再開して今年度も盛況だった。園の先生らも子どもたちと再会を喜び合い、みんなの成長した姿に目を細め、学校での話を聞いたりしながら楽しいひとときを過ごす。

卒園した子が不安になったり迷ったりして立ち止まったとき、あるいは保護者が子育てに悩んだとき、かつて一緒に悩み、喜んだ幼稚園の先生を思い出してほしい。PriPri にも書かれているが、この園の多様な取り組みの中には、年に数回しか相談がこないものもある。それでも、1 件でもあれば、それを必要なこととして受け止めて支援する。園が大切にしているインクルージョンとは、すべての人が尊重され、一人ひとりがその能力を発揮できる環境づくりである。

